

田岡嶺雲参考文献目録

——明治二十五年～昭和十九年——

鈴木 一 正

要旨 本目録は、高知出身で明治期に活躍した評論家・中国文学者・ジャーナリストの田岡嶺雲（一八七〇～一九二二）の参考文献目録の『戦前編』である。収録期間は、明治二十五年（一八九二）から昭和十九年（一九四四）までの五十三年分で、小生作成の「田岡嶺雲参考文献目録―昭和二十一年～平成十五年―」（『国文学研究資料館紀要』文学研究篇、第31号、平17・2）の『前に』続くものである。

これまで田岡嶺雲の参考文献目録はいくつか作成されているが、網羅的なものはほとんどなかった。本目録では、先行の参考文献目録に未収載の文献を大幅に加えるとともに、なるべく現物を確認し、正確を期すことにした。また、先行目録が省略した巻号や副題を加え、単行本収録の情報も付加した。

凡 例

一、本目録は、高知出身で明治期に活躍した評論家・中国文学者・ジャーナリストの田岡嶺雲（一八七〇～一九一二）の参考文献目録の「戦前編」である。

一、収録期間は、副題が示すとおり、明治二十五年（一八九二）から昭和十九年（一九四四）までの五十三分と
した。

一、排列は、発行年月日順に並べた。発行日が同じ場合は、誌（紙）名の五十音順とし、雑誌等で同時に複数の論文掲載の場合は掲載順とした。

一、タイトルは、原則として目次ではなく、本文のものを採用した。副題は、なるべく採用するようにしたが、所収書名の副題は省略した。なお、副題の表記は、記載のとおりとした。

一、雑誌等の巻号は、なるべく採用するよう努めた。

一、単行本は『』、雑誌等は「」で示し、叢書名・特集名等、補足的事項は（ ）を用いた。また無署名の場合は、——で表示した。その他、必要に応じて注記した。

一、雑誌・新聞の新刊紹介・書評欄等で取り上げられた場合、単行本の書名に『』を、雑誌名に「」を補記した。

一、連載・分載の場合は、一括で記入し、著者名の上に*印を付した。

一、原則として、雑誌等の「初出」によった。初出不明、未確認の場合は、単行本所収時のものを記載した。なお、所収書名は、↓『』で示した。

一、巻末に、前号掲載の「田岡嶺雲参考文献目録—昭和二十一年～平成十五年—」の補遺を付した。

【明治期】

⁹²山路愛山 栩々生に答ふ〔国民新聞〕明25・10・19

⁹³工藤晋平 史海第廿六巻を讀みて 蘇東坡〔批評〕

〔史海〕第27巻、明26・9・28 和歌「その心天地より広ければすみて住憂き郷なかりけり」

史海第廿六巻に対する各新聞の批評〔批評〕

〔同右〕「蘇東坡」評を含む

⁹⁴「史海」〔第三十一巻〕〈最近出版書〉〔読

売新聞〕明27・3・3 〔芭蕉〕評を含む

遊谷子 敢て駁するにあらず予が意見を述ふ〔批評〕

〔史海〕第32巻、明27・3・28

時論〔早稲田文学〕第78号、明27・12・

25 〔十九世紀西欧に於ける東洋の思想〕〔東亜説
林〕第2号 評を含む

⁹⁵ 雑誌文学一斑〔彙報〕〔早稲田文学〕第84

号、明28・3・25 〔青年文〕評を含む

〔青年文〕／〔東亜説林〕〔雜報〕〔帝国

文学〕第4、明28・4・10

現時の文学論〔彙報〕〔早稲田文学〕第92

号、明28・7・25 〔日本文学に於ける新光彩〕

〔日本人〕第1号 評を含む

時論〔早稲田文学〕第93号、明28・8・

10 〔詩人と厭世観〕〔日本人〕第2号 評を含む

絵画界の風潮〔彙報〕〔早稲田文学〕第96

号、明28・9・25 〔東洋的新美学を造れよ〕

〔日本人〕第5号 評を含む

時論〔早稲田文学〕第97号、明28・10・

10 〔禅宗の流行を論じて今日の思想界の趨勢に及

ぶ〕〔日本人〕第6号 評を含む

禅宗に関する批評〔彙報〕〔早稲田文学〕第

98号、明28・10・25 〔禅宗の流行を論じて今日の
思想界の趨勢に及ぶ〕〔日本人〕第6号 評を含む

愛汀生 悲惨小説〔時文月旦〕〔同右〕〔小説界の潮向〕

〔青年文〕記者 評を含む

新刊〔早稲田文学〕第99号、明28・11・

10 〔太陽の文学評論記者並に帝国文学の雜録記者

に答ふ」〔日本人〕第8号〕評を含む

筑水 東洋の新美学〔時文月旦〕(同右)「東洋的

の新美学を造れよ」〔日本人〕第5号〕評を含む

文壇消息〔彙報〕〔早稲田文学〕第100号、

明28・11・25)「太陽の文学評論記者並に帝国文学

の雑誌記者に答ふ」〔日本人〕第8号〕評を含む

⁹⁶ 廿八年の俳壇〔彙報〕〔早稲田文学〕第2

号、明29・1・22)「青年文」時文記者の評を含む

文学界 文士出世の途〔彙報〕〔早稲田文

学〕第3号、明29・2・1)「青年文」論者の評を

含む

新年に於ける文学雑誌〔文学〕〔太陽〕第

2巻第3号、明29・2・5)「帝国文学」(第2巻第

1号)／「青年文」評を含む

文学界 紅葉是非〔彙報〕〔早稲田文学〕

第4号、明29・2・15)嶺雲文〔明治評論〕掲載)

評を含む

掀天居士 田岡嶺雲君に与ふ〔日本人〕第16号、明

29・2・20)

現今批評価値／地方文学〔彙報〕〔早稲田

文学〕第5号、明29・3・1)「批評と定見」〔青

年文〕記者)／「青年文」評を含む

嘲罵の風〔彙報〕〔早稲田文学〕第6号、

明29・3・15)「青年文」評を含む

史学界 歴史的研究〔彙報〕〔早稲田文学〕

第7号、明29・4・1)「予言者の眼をもて」〔青

年文〕記者)評を含む

時論一斑 貧民を詩題とせよ〔彙報〕〔早

稲田文学〕第8号、明29・4・15)「詩人と人道」

〔日本人〕第18号)評を含む

彙報記者 『青年文』記者に告ぐ〔雑俎〕(同右)「批

評と作者」〔青年文〕評を含む

臨風 嶺雲を送る〔日本人〕第22号、明29・

5・20)漢詩

犀東 送嶺雲氏之吉備(同右)

『青年文』〔文学〕〔太陽〕第2巻第12号、

明 29・6・5)

田岡嶺雲を送る〈鬼雷唾余〉(「白百合」第

2巻、明 29・6・7)

青羅 瑣言(「青年文」第3巻第5号、明 29・

6・10)

文学界 鵬外対諸新聞雑誌／天才と常識

〈彙報〉(「早稲田文学」第12号、明 29・6・15)「俳

論家としての支考」(「青年文」)／栩々生の文(「青

年文」) 評を含む

赤門文学〈時文〉(「文学界」第42号、明 29

・6・30)

雑誌の文学記者〈彙報〉(「早稲田文学」第

14号、明 29・7・15)「青年文」評を含む

正直正太夫 霹靂車(「めさまし草」巻8、明 29・9

・2)

墨水 嶺雲子を送る〈芭蕉の葉影〉(「青年文」第

4巻第2号、明 29・9・5)俳句「短夜の君に歌か

く別れかな」

東西南北生 落葉のはきよせ(批評)〔「国民之友」第

313号、明 29・9・12)

文学界 偉人論〈彙報〉(「早稲田文学」第

18号、明 29・9・15)嶺雲文(「日本人」掲載)評

を含む

犀東 風塵余録(「日本人」第30号、明 29・11・

5)「東亜説林」評を含む

橘香生 落葉一掃(小観)〔「新声」第1巻第5号、明

29・11・10)「雲のちぎれ」(「青年文」掲載)評を

含む

『江湖文学』〈彙報 時文〉(「国学院雑誌」

第3巻第1号、明 29・11・20)

文壇消息〈彙報〉(「早稲田文学」第23号、

明 29・12・1)「江湖文学」評を含む

『江湖文学』第1号〈彙報 新刊〉(「国学

院雑誌」第3巻第2号、明 29・12・20)

怪菴

風聞録(「日本人」第33号、明 29・12・20)

田岡嶺雲〈小観〉〔「新声」第2巻第1号、

明 30・1・10

—— 同人の消息〈江湖喁語〉（「江湖文学」第3

号、明 30・1・20）

星腸 嶺雲子に寄す（同右）俳句「我庵や松の木

の間を時雨ふる」

—— 文学界 昨年の文壇対諸新聞雑誌（承前）

〈彙報〉（「早稲田文学」第27号、明 30・2・1）「青

年文」記者の評を含む

—— 創作の才と批評の才と〈時文觀察〉（「明治

会叢誌」第96号、明 30・2・20）

—— 文壇雜俎〈文学〉（「太陽」第3巻第5号、

明 30・3・5）

—— 罵殺〈小観〉（「新声」第2巻第3号、明 30

・3・10）「青年文」評を含む

梅溪生 文界小観〈梅花数朶〉（同右）「青年文」評を

含む

—— 東北の趣味〈文界時評〉（「反省雑誌」第12

年第3号、明 30・4・1）

—— 田岡嶺雲氏〈批評家月旦〉（「時文」）（「新著

月刊」第1号、明 30・4・3）

—— 批評壇の沈滞〈時文觀察〉（「明治会叢誌」

第97号、明 30・5・20）

—— 文学界 文壇消息〈彙報〉（「早稲田文学」

第35号、明 30・6・1）「支那文学大綱」（刊行予告

を取り上げる

—— 哲学界 美学の研究〈彙報〉（「早稲田文学」

第39号、明 30・8・1）

—— 漢学者の渡清〈雜報〉（「帝国文学」第3巻

第9号、明 30・9・10）

—— 風塵録〈時評〉（「太陽」第3巻第19号、明

30・9・20）『支那文学大綱』第1巻の評を含む

橘香（佐藤橘香）『支那文学大綱』を歓迎す／田岡

嶺雲を送る〈文界小観〉（「新声」第3巻第4号、明

30・10・10）

—— 『支那文学大綱』〈文界時評〉（「反省雑誌」

第12巻第9号、明 30・11・1）

筑波会（近藤泥牛編『新派俳家句集』白鷗社、明30・11・15）「東京及地方の俳句会」のうち

文壇雜俎（時評 文芸界）（『太陽』第3巻第24号、明30・12・5）

'98

『蘇東坡』（田岡嶺雲氏著）（『新刊』（『早稲田文学』第7巻第4号、明31・1・3）

怪菴

風聞録（『日本人』第58号、明31・1・5）
慷慨狂（『小観』（『新声』第4巻第2号、明

31・2・15）

万国東洋学会に於る井上氏の所論（時評）

（『教林』第57号、明31・3・10）

鯉洋に告ぐ（『小観』（『新声』第4巻第3号、

明31・3・15）

田岡嶺雲（『小観』（同右）

文学 改良雜誌（『彙報』（『早稲田文学』第7年第7号、明31・4・3）「文庫」評を含む

断雲片々（『時文』（『文芸俱樂部』第4巻5

編、明31・4・10）

佐藤橘香 雜観（『小観』（『新声』第4巻第4号、明31・4・15）

国府犀東 嶺雲鯉洋に与ふ（『文庫』第9巻第3号、明31・4・20）

淡水子 軒の雫（同右）嶺雲の俳句「曳きすてし御所車あり春の月」の引用あり

饒洲生 寄田岡嶺雲君（『飛花落葉』（『文庫』第9巻第4号、明31・5・5）

花峯生 けふ此ころ（『花片々』（『新声』第4巻第5号、明31・5・15）「田岡嶺雲」を含む

怪菴 田岡嶺雲（『風聞録』（『日本人』第68号、明31・6・5）

新宮水哉 田岡嶺雲氏に寄すとして（『文庫』第9巻第6号、明31・6・5）和歌「ひとすじに皇国を思ふまご、ろの花こそ文の上にほへれ」

大町桂月 文学と時世（『時文』（『文芸俱樂部』第4巻第7編、明31・6・10）

たんすゐ 曳船の声（『飛花落葉』（『文庫』第10巻第4

号、明31・9・20)

田岡嶺雲〈片々〉〔「新声」第5巻第4号、

明31・10・25)

鳥水 花筏に与ふ〈飛花落葉〉〔「文庫」第10巻第

6号、明31・11・3)

佐藤橘香 文界小観〈本領〉〔「新声」第5巻第6号、

明31・12・15)

妖堂 田岡嶺雲〈文壇風聞記(其二)〉(同右)

花筏 鳥水に答ふ〈飛花落葉〉〔「文庫」第11巻第

2号、明31・12・20)

鳥水 右に對して。〈飛花落葉〉(同右)

⁹⁹妖堂 文壇風聞記(三)〔「新声」第1編第1号、

明32・1・15)〔「嶺雲」を含む

白眼觀世老 乾坤一筆録 (二) 文壇所見〈南西北東〉

(同右)〔「田岡嶺雲」を含む

明治三十一年の文学界(彙報)〔「六合雜誌」

第217号、明32・1・15)

文学界(彙報)〔「六合雜誌」第218号、明32

・2・15)

桂浜月下漁郎(大町桂月) 序(田岡嶺雲著)〔嶺雲揺

曳〕新声社、明32・3・31)

笹川臨風 序(同右)

幸徳秋水 序(同右) 無題漢詩(醉来意氣掃千軍…)

佐藤秋蘋 問嶺雲兄(同右) 漢文。↓〔幻の言論人

〔佐藤秋蘋〕茨城新聞社、平2・7

幸徳秋水 嶺雲揺曳題詞〔「新声」第1編第4号、明

32・4・15) 漢詩

妖堂 文壇風聞記(五)(同右)〔「田岡嶺雲」を含

む

泊雁 白雲紅霞〈南西北東〉(同右)〔「田岡嶺雲」

〔「嶺雲揺曳」を含む

〔「嶺雲揺曳」田岡嶺雲氏著(新刊案内)〕〔太

陽〕第5巻第9号、明32・4・20)

碧潭生 〔「春風秋声」を評す〕〔「新声」第1編第6

号、明32・5・15)〔「魔王物語」評を含む

永田勝次郎 〔「嶺雲揺曳」を読む(同右)

文界片信〈彙報〉〔国学院雑誌〕第5巻第

7、明32・5・20)

白眼愚禪 細雨霏々録 文壇所見〈南西北東〉〔新声〕

第1編第7号、明32・6・15)

『嶺雲揺曳』田岡嶺雲著〈新刊批評〉〔中

央公論〕第14年第6号、明32・6・18)

田岡嶺雲〈妖堂居士編『文壇風聞記』新声

社、明32・7・19)

文士夏季消息〈海内彙報 文学美術〉〔太

陽〕第5巻第18号、明32・8・20)

雜感〈嚴霜烈日〉〔新声〕第2編第5号、

明32・10・25)『嶺雲揺曳』評を含む

老朽漢学者と少壮漢学者〈文学〉〔中央公

論〕第14年第12号、明32・12・1)

桂月嶺雲の徒〈文学〉(同右)

田岡嶺雲〈怪庵編『文士政客風聞録』大学

館、明32・12・16) 目次タイトルによる

『支那文学大綱 高青邱』田岡嶺雲著〈雜報〉

〔帝国文学〕第6巻第2、明33・2・10)

無名氏 桂月と嶺雲〈文士月旦〉〔新声〕第3編第

2号、明33・2・15)

『高青邱』〈新刊紹介〉〔新小説〕第5年

第3巻、明33・2・25)

麦舟郎 ちび箒〈光風霽月〉〔文庫〕第14巻第3号、

明33・3・15)

妖堂 文壇風聞記〈人物〉〔新声〕第3編第4号、

明33・4・15)『田岡嶺雲』を含む

大学の文秀才〈文学〉〔中央公論〕第15年

第4号、明33・4・20)

飛目生 有象無象〔明星〕第2号、明33・5・1)

『田岡嶺雲』を含む

『雲のちぎれ』田岡嶺雲著〈新刊批評〉

〔中央公論〕第15年第5号、明33・5・20)

社告 本社内外特派員〔九州日報〕明

33・6・21) 天津及北京間の特派員となった田岡嶺

雲を紹介

江藤桂華 現時の文壇（『文学攻究法』〈青年文学叢書第1編〉三省堂書店・渡辺書店、明33・7・8）

社告（『九州日報』明33・7・25）「天津危

急の際本社第一特派員田岡嶺雲は其筋の注意に依り一旦他特派員と共に帰社し…」26、27日にも同様の社告掲載

鯉洋生 嶺雲に謝す（『九州日報』明33・8・9）

破鐘露花 文芸雑俎（『明星』第6号、明33・9・12）

嶺雲評を含む

梅溪 文芸雑俎（『明星』第7号、明33・10・12）

嶺雲の「中国民報」入社の評を含む

妖堂 文壇風聞記〈人物〉（『新声』第1編第1号、

明33・10・15）

『侠文章』田岡嶺雲・宮奇米城合著（批評）

（『帝国文学』第6編第12、明33・12・10）

01*高山林次郎 現代文章私見（『中学世界』第4巻第

6、9号、明34・5・10、7・10）↓『改訂註釈梶

牛全集』第2巻、博文館、大15・1

梶牛生 無題録（三）（『文芸時評』〈「太陽」第7巻第8号、明34・7・5）

妖堂居士 鯉洋と嶺雲（佐藤儀助編『文壇楽屋観』新

声社、明34・7・13）

王秋林 従軍余談（同右）

玄々子 文士雅号譚（同右）

笹川臨風 序（田岡嶺雲著『下獄記』文武堂、明34・

7・23）↓『田岡嶺雲全集』第5巻、法政大学出版

局、昭44・11

病秋蘋 序（同右）↓『田岡嶺雲全集』第5巻、法

政大学出版局、昭44・11。『幻の言論人「佐藤秋蘋」』

茨城新聞社、平2・7

北村馬骨 嶺雲下獄（同右）↓『田岡嶺雲全集』第5

巻、法政大学出版局、昭44・11

松本武正 嶺雲を憶ふ（同右）↓『田岡嶺雲全集』第

5巻、法政大学出版局、昭44・11

佐藤秋蘋 獄中の嶺雲に与ふ（同右）↓『田岡嶺雲全

集』第5巻、法政大学出版局、昭44・11。『幻の言

論人「佐藤秋蘋」 茨城新聞社、平2・7

鳳仙生 嗚呼嶺雲（同右）↓『田岡嶺雲全集』第5

卷、法政大学出版局、昭44・11

白河鯉洋 嶺雲に寄す（同右）↓『田岡嶺雲全集』第

5卷、法政大学出版局、昭44・11

大町桂月 赤門文士に就いて（「新文芸」第1巻第8

号、明34・8・1）

—— 青年の伴侶（「文芸小観」（「新声」第6編第

2号、明34・8・15）『嶺雲揺曳』評を含む

樗牛生 無題録十五則（「太陽」第7巻第10号、明

34・9・5）『下獄記』評を含む

与謝野鉄幹 余材（「報道」（「明星」第15号、明34・

9・5）『江湖評論』評を含む

四朗 舌三寸（「文庫」第18巻第4号、明34・

9・15）

高須梅溪 桂月と嶺雲／少壮論客（新声社同人著『明

治文学批評』新声社、明34・10・12）

—— 当今の新聞記者 嶺雲田岡佐代治先生（「万

朝報」明34・11・27）（「新聞記事」

⁰² 佐々醒星 感情の小説と意志の小説（「時評」（「文芸界」

第1巻第9号、明35・10・15）

平尾不孤 写実主義の根本的謬想とは何ぞや（「評論」

（「文芸界」第1巻第10号、明35・11・15）↓『近代

文学評論大系』第2巻、角川書店、昭47・6

平尾不孤 忙中閑語 田岡嶺雲氏に答ふる書（「時評」

（「文芸界」第11号、明35・12・15）↓『近代文学評

論大系』第2巻、角川書店、昭47・6

⁰³ * 飛七首生 久保天随（「当今の健筆家」（「月旦」（「文

庫」第22巻第3、4号、明36・1・15、2・1）

—— 中国民報主筆 田岡嶺雲君（「人物」（「社会

主義」第7年第8号、明36・3・18）

△△生 文壇風聞記（「新声」第10編第5号、明

36・11・15）『田岡嶺雲』を含む

△○□ 大絃小絃（「論評」（「文庫」第24巻第5号、

明36・11・15）

⁰⁴ 大町桂月 交友録（一）（「新声」第11編第1号、明

37・1・1)

編輯便り(同右)

田岡嶺雲を送る(「中国民報」明37・11・

3)〈新聞記事〉

一記者 明治文壇側面史(三) 自明治二十一年至

明治三十七年吾『文庫』の歴史(「文庫」第28巻第

3号、明38・2・15)「中」少年文庫時代(四)

KN生 甘言苦語(「新潮」第2巻第4号、明38・

3・27)「天鼓」評を含む

波の輪 緩調急調(「新声」第12編第3号、明38・

4・1)「天鼓」評を含む

黄孫樹 読者気焰欄(同右)

田中寂花 余の好む作家及び作物(二)(同右)「田岡嶺

雲『嶺雲揺曳』」を含む

一記者 明治文壇側面史(四) 自明治二十一年至

明治三十七年『文庫』の歴史(「文庫」第28巻第5

号、明38・4・1)「下」文庫時代

入沢涼月 敢て警告す(「白虹」第1巻第4号、明

38・4・5)「天鼓」評を含む

六号活字(「文庫」第28巻第6号、明38・

4・15)「近松物に現はれたる心中」評

国府犀東 壺中観に冕す(田岡嶺雲著『壺中観』嵩山

房、明38・4・18)

笹川臨風 序／大町桂月 序

大町桂月 随観随感(「文芸時評」(「太陽」第11巻第7

号、明38・5・1)「天鼓」評を含む

湯浅観明 田岡嶺雲(『百字文百人評』如山堂書店、

明38・5・5)

犀東居士 嶺雲に髣す(田岡嶺雲著『うろこ雲』嵩山

房、明38・6・5)

内藤湖南 切磋商／国府犀東 切磋商／笹川臨風

切磋商／佐藤秋蘋 切磋商

鐘樓守 甘言苦言(「白虹」改巻号、明38・6・10)

「天鼓」評を含む

高浜天我 嶺雲の近業(同右)

石菖洞 文界四方山話(「出版界」(「文庫」第29巻第

3号、明38・7・15)

双眼生・桃太郎 甘言苦語〔「新潮」第3巻第1号、

明38・7・25)

弱法師 文壇色分帳(下)〔「新声」第13編第2号、

明38・8・1)

――『うろこ雲』田岡嶺雲著〈新刊紹介〉(同右)

長谷川天溪 無題録〈文芸〉〔「太陽」第11巻第11号、

明38・8・1)『うろこ雲』評を含む

血来山人・樗雲迂人 雑誌評判記(一)〈評論〉〔「中

央公論」第20年第8号、明38・8・1)「天鼓」評

を含む

銀月 嶺雲君へ(「天鼓」第10号、明38・8・23)

覆面武者 文壇如是我聞〔「新声」第13編第3号、明

38・9・1)

桂浜月下漁郎 田岡嶺雲を送る〈文芸時評〉〔「太陽」

第11巻第12号、明38・9・1)

――六号活字〔「文庫」第29巻第5号、明38・

9・1)〔「田岡嶺雲の岡山を去るや、…」

村夫子 偶言録〔「新潮」第3巻第3号、明38・

9・15)

崑崙生 甘言苦語(同右)「天鼓」評を含む

鸚鵡生 口真似(当代作家の腹の中を)〔「文庫」第

29巻第6号、明38・9・15)

銀月 会见(「天鼓」第12号、明38・9・25)

獅子児 緩調急調〔「新声」第13編第4号、明38・

10・1)

片山緑児 現代の批評家を論ず〈文界の人物〉(同右)

筑波会 田岡嶺雲の清国に遊ぶを送る(「天鼓」第

13号、明38・10・10)

高田 祈 六号活字〔「文庫」第30巻第1号、明38・

10・15)〔「文声」一人は嶺雲のやうな男あつてもよ

ろし、…」

荒尾讓介 一筆啓上〔「新声」第13編第5号〈白露号〉、

明38・10・20)

洞の人 故人今人(二)〔「文庫」第30巻第2号、明

38・11・3)「田岡嶺雲」を含む

風聞子 此頃の出版界（同右）「天鼓」評を含む

辻斬將軍 百人斬（「文庫」第30巻第4号、明38・

12・15）「嶺雲」を含む

大町桂月 田岡嶺雲を送る（「我が文章」日高有倫堂、

明38・12・25）

⁰⁶鉄剣子 丙午文壇未来記（「文庫」第31巻第1号、

明39・2・1）

樋口罔象 嶺雲足下（「天鼓」第19号、明39・3・5）

犀東居士 壺中我観に冕す（田岡嶺雲著『壺中我観』

高山房、明39・3・6）

笹川臨風 序／大町桂月 序

浩々 虚栄の虚栄 嶺雲の「現代病根」を読みと

（「新潮」第4巻第3号、明39・3・25）

▲□△ 今人古人（「文庫」第31巻第4号、明39・

4・15）「田岡嶺雲と米屋」を含む

六号活字（同右）（田岡嶺雲はいつも逃げ

出す事に妙を得て…）

――『壺中我観』田岡嶺雲著（新刊紹介）（同右）

――『壺中我観』（新刊批評）（「中央公論」第21

年第5号、明39・5・1）

⁰⁷浪裡白跳 時文家の文章評（「日本及日本人」第42号、

明40・2・1）「田岡嶺雲」を含む

碧山楼主人 中央文壇を去れる文章家（「文章世界」

第2巻第2号、明40・2・15）

高須梅溪 回顧十年（「新潮」第6巻第5号、

明40・5・20）

⁰⁸ 時報（「新小説」第13巻第3巻、明41・3

・1）「田岡嶺雲氏」を含む

――文芸新聞（「文庫」第37巻第5号、明41・

9・1）「田岡嶺雲」を含む

⁰⁹ 田岡嶺雲（「現代文士録」）（「文章世界」第4

巻第2号、明42・2・1）

米津鉄平 送嶺雲窓友之作州（大町桂月・笹川臨風・

白河鯉洋・樋口龍峽編『むら雲』日高有倫堂、明

42・2・5）

――寄贈された雑誌（「文章世界」第4巻第4

号、明42・3・15)「黒白」(第2巻第1号) 評を含む

―― 黒白社同人会の記(第一回例会) (「黒白」

第2号、明42・3・20)

秋元澡雪 嶺雲を憶ふ(同右)

―― 四月号の各雑誌(月旦) (「新小説」第14年

第5巻、明42・5・1)「黒白」(「女子解放論」掲載 評を含む

正岡芸陽 嶺雲足下(大町桂月・樋口龍峽編『寄る波』

日高有倫堂、明42・6・25)

―― 緩調急調(雑俎) (「新声」第20巻第6号、

明42・7・1)「田岡嶺雲」を含む

正岡芸陽 嶺雲足下(大町桂月・樋口龍峽編『千波万

波』日高有倫堂、明42・7・10)

―― 『三人』田岡嶺雲訳(新刊紹介) (「文庫」第

39巻第6号、明42・8・1)

大町桂月 田岡嶺雲へ(「桂月書翰」龍江堂、明42・

9・6) 明43・5に修学堂書店から増訂版

白河鯉洋 序(田岡嶺雲著『明治叛臣伝』日高有倫堂、明42・10・18)

笹川臨風 謀叛論(同右)

¹⁰⁾―― 田岡嶺雲(現代文士録) (「文章世界」第5

巻第2号(梅花号)、明43・2・1)

斎藤弔花 雲雀(同右)

―― 『和訳老子、和訳莊子』田岡嶺雲訳註(新刊紹介) (「文章世界」第5巻第7号、明43・5・15)

―― 『和訳韓非子』(田岡嶺雲訳註) (新刊雑誌

と書籍) (「読売新聞」明43・6・1)

―― 『和訳韓非子』田岡嶺雲訳註(玉石同架)

(「日本及日本人」第53号、明43・6・15)

―― 『和訳韓非子』田岡嶺雲訳註(新刊紹介)

(「文章世界」第5巻第8号、明43・6・15)

島田司馬太 『和訳韓非子』田岡嶺雲訳註(新刊紹介)

(「ホトトギス」第13巻第12号、明43・7・1)

大町桂月 嶺雲の文集に題す(「ちび筆」至誠堂書店、

明43・7・5)

大町桂月 序（田岡嶺雲著『病中放浪』）玄黄社、明

43・7・15）

笹川臨風 嶺雲と僕／白河鯉洋 序／斎藤弔花 雲

雀〔跋〕

〔和訳戦国策〕田岡嶺雲訳註（玉石同架）

〔日本及日本人〕第539号、明43・8・15）

〔和訳戦国策〕田岡嶺雲著（新刊紹介）〔文

章世界〕第5巻第11号、明43・8・15）

薫女史 田岡嶺雲先生に（『読売新聞』）明43・8・

17）

〔和訳戦国策〕田岡嶺雲訳註（新刊批評）

〔中央公論〕第25年第9号、明43・9・1）

戸川秋骨 読書の回想（『読売新聞』）明43・10・2）

〔和訳戦国策〕（田岡嶺雲訳註）（新刊雑誌

と書籍）（『読売新聞』）明43・10・11）

〔和訳戦国策 和訳荀子〕田岡嶺雲訳註（新

刊紹介）〔太陽〕第16巻第16号、明43・12・1）

〔和訳荀子〕（田岡嶺雲氏訳註）（新著紹介）

〔新小説〕第15年第12巻、明43・12・2）

山口孤剣 多情多恨の田岡嶺雲先生（『明治百傑伝』

第1編、洛陽堂、明44・1・18）

安倍能成 五月の評論（『ホトトギス』）第14巻第11号、

明44・6・1）「上杉博士の婦人問題を讀む」（『文

章世界』）評を含む。上杉慎吉著『婦人問題』評に

ついて

岩野泡鳴 新発想論（『文章世界』）第6巻第9号、明

44・7・1）

〔和訳史記列伝〕下巻 田岡嶺雲訳註（玉

石同架）〔日本及日本人〕第563号、明44・8・1）

孫悟空 文人分布系統図 南海の文人（『文章世界』

第6巻第11号、明44・8・1）

〔和訳史記列伝〕下巻（田岡嶺雲訳註）（新

刊書籍と雑誌）（『読売新聞』）明44・8・12）

〔和訳七書〕と『鬼谷子』田岡嶺雲訳註（新

刊批評）〔中央公論〕第26年第9号、明44・9・1）

〔和訳七書〕〔和訳鬼谷子〕田岡嶺雲訳註

〈玉石同架〉（「日本及日本人」第566号、明44・9・

15）

『和訳七書』『和訳鬼谷子』（田岡嶺雲訳註）

〈新刊書籍と雑誌〉（「読売新聞」明44・9・25）

『和訳七書』『和訳鬼谷子』（田岡嶺雲氏訳

註）〈新刊紹介〉（「太陽」第17卷第13号、明44・

10・1）

¹²

『和訳墨子、列子』田岡嶺雲訳註、『和訳

維摩經』田岡嶺雲訳註〈玉石同架〉（「日本及日本人」

第574号、明45・1・15）

和訳漢文叢書第九編『墨子、列子』（田岡

嶺雲氏訳註）〈新著紹介〉（「新小説」第17年第2卷、

明45・2・1）

田岡嶺雲氏慰安会〈文界時報〉（「文章世界」

第7卷第2号、明45・2・1）

『和訳春秋左伝』田岡嶺雲訳註〈新刊紹介〉

（「文章世界」第7卷第6号、明45・5・1）

雪嶺行人 序（『数奇伝』玄黄社、明45・5・15）

碧梧桐 序文／鏡太郎 序文／秋声生 序文／登張

竹風 序文／堺 利彦 序文／劍峯 序／佐々醒雪

序文／藤井紫影 序／犀東居士 序文／千葉秀甫

序文／鹿島桜巷 嶺雲君と初対面の印象／大町桂月

序／笹川臨風 序／白河鯉洋 数奇伝の首に／正岡

芸陽 題数奇伝 三首／笹川臨風 嶺雲と僕

『数奇伝』田岡嶺雲伝〈新刊紹介〉（「文章

世界」第7卷第8号、明45・6・1）

『和訳東萊博議』田岡嶺雲訳註〈新刊紹介〉

（同右）

白河鯉洋・笹川臨風 序（白河鯉洋・笹川臨風編『嶺

雲文集』大1・6・25）

中原司馬雄 田岡嶺雲氏の『数奇伝』（新著四種）

（「文章世界」第7卷第9号、明45・7・1）

【大正期】

田岡嶺雲氏逝く〈時報〉（「新小説」第17年

第9卷、大1・9・1）

田岡嶺雲氏重態 日光客舎に於て（「読売

新聞」大1・9・6)〈新聞記事〉

田岡嶺雲氏逝く 数奇なる四十年(「東京

朝日新聞」大1・9・8)〈新聞記事〉

田岡嶺雲氏逝く 日光の客舎に於て(「東

京日日新聞」大1・9・8)〈新聞記事〉↓『数奇

伝』第三版、玄黄社、大1・12

田岡嶺雲氏逝 臨終まで意識明瞭(「東京

毎日新聞」大1・9・8)〈新聞記事〉

文星殞つ 嶺雲日光に客死す(「二六新報」

大1・9・8)〈新聞記事〉

田岡嶺雲氏逝く(「報知新聞」大1・9・

8)〈新聞記事〉↓『数奇伝』第三版、玄黄社、大

1・12

一記者 嶺雲氏の臨終 病床の悲劇(同右)↓『数

奇伝』第三版、玄黄社、大1・12

田岡嶺雲逝く(「都新聞」大1・9・8)

〈新聞記事〉

文壇奇才を失ふ 田岡嶺雲氏 日光の仮寓

に逝く(「読売新聞」大1・9・8)〈新聞記事〉↓

『数奇伝』第三版、玄黄社、大1・12

犬養 毅(談) 禅味、道味(同右)↓『数奇伝』第

三版、玄黄社、大1・12

黒頭巾 噫、嶺雲(同右)↓『数奇伝』第三版、玄

黄社、大1・12

田岡嶺雲氏逝く(「万朝報」大1・9・8)

〈新聞記事〉

*有秋生 数奇伝の人(「二六新報」大1・9・9、11)

彼は致命的な恋を経験せり／未だ見ぬ吾兄／平和な

る終焉。↓『数奇伝』第三版、玄黄社、大1・12

「哀なるわが兄」 故嶺雲のわすれがたみ

(「万朝報」大1・9・9)

浩々歌客 読書社会 田岡嶺雲子(「東京日日新聞」

大1・9・10)

嶺雲氏の葬儀(「読売新聞」大1・9・10)

〈新聞記事〉

譲二(原田譲二) 嶺雲先生の記憶(同右)

田岡嶺雲氏の葬儀〔文芸消息〕（二六新報）

大1・9・11）（新聞記事）

嶺雲氏の葬儀 昨日の谷中斎場（読売新聞）

大1・9・11）（新聞記事）

*徳田秋声 逝ける田岡嶺雲（大阪新報）大1・9・

21、22、24）↓『徳田秋声全集』第19巻、八木書店、

平12・11

田岡嶺雲氏逝く（時報）（新小説）第17年

第10巻、大1・10・1）

笹川臨風 嶺雲終焉記（中央公論）第27年第10号、

大1・10・1）↓『嶺雲文集』玄黄社、大2・6

白河鯉洋 嶺雲を弔す（同右）↓『嶺雲文集』玄黄社、

大2・6

田岡嶺雲氏の逝去（文界時報）（文章世界）

第7巻第13号、大1・10・1）

藤田剣峯 嶺雲は神去つた（読売新聞）大1・10・

6）（日曜附録）以下同

樋口龍峽 予の親たる嶺雲／白河鯉洋 悼嶺雲／田

岡典章 悼嶺雲／木村久寿弥太 悼嶺雲／徳田秋声

故嶺雲兄↓『徳田秋声全集』第19巻（八木書店、平

12・11）／清風明月楼 嶺雲につきて／鵬心生 タ

ブレット／健堂 日曜記／小柳司気太 嶺雲と予との

交情／木村鷹太郎 田岡君と余と／沼波瓊音 俳

人としての嶺雲／堺 利彦 嶺雲と鯉洋／原田譲二

最後の崇拜者

山縣五十雄 奇才田岡嶺雲（京城雜筆）内外出版協

会、大1・10・25）

魯庵生 気紛れ日記（太陽）第18巻第15号、大

1・11・1）「田岡嶺雲氏」を含む

久津見麻村 読書余瀝（現代八面鋒）丙午出版社、

大1・12・1）『三人』評を含む

嶺雲先生臨終の新聞記事（数奇伝）第三

版、玄黄社、大1・12・12）「読売新聞」「東京日日

新聞」「報知新聞」「二六新聞」による臨終記事の転

載

本書に対する批評（同右）徳富主筆 東京

だより〔国民新聞〕／健堂 数奇伝〔読売新聞〕／

数奇伝〔東京朝日新聞〕／潮音楼主人 数奇伝を読む〔高知新聞〕／兵衛

数奇伝を読む〔神戸又新〕による書評等の転載

¹³沼波瓊音 我が知れる嶺雲子〔此一筋〕〔大正文庫第

2編〕丙午出版社、大2・4・11

鳴雪 吾々の俳句会の変遷〔ホトトギス〕第16

巻第8号臨時増刊、大2・6・20

第四回懸賞批評募集 嶺雲文集〔読売新

聞〕大2・7・4 〔嶺雲文集〕の批評募集

〔嶺雲文集〕〔田岡嶺雲氏著〕〔新著紹介〕

〔新小説〕第18年第8巻、大2・8・1

〔嶺雲文集〕〔新刊紹介〕〔文章世界〕第8

巻第10号、大2・8・1

菊池比呂士 生の浪漫的化〔第四回懸賞批評〕〔嶺雲文

集〕第一等〔読売新聞〕大2・8・17

森歛之助 〔嶺雲文集〕を読み〔第四回懸賞批評

〔嶺雲文集〕第二等〕〔同右〕

竹中歌吉 恋の嶺雲 〔数奇伝補遺〕〔絶筆〕〔同右〕

嶺雲氏の一回忌速夜〔読売新聞〕大2・9

・7〕〔新聞記事〕

¹⁴生方敏郎 流行児の盛衰と文壇諸団体の勢力消長史―

団体評論第一―〔人物評論〕〔新日本〕第4巻第5

号、大3・4・3 〔高山樗牛と前期赤門派〕を含

む

田岡嶺雲〔片岡仁泉編〕〔近代土佐人〕土陽

週報社、大3・5・7

田中貢太郎 田岡嶺雲、幸徳秋水、奥宮健之追懷録

〔説苑〕〔中央公論〕第29年第13号、大3・12・1

↓貢太郎見聞録 大阪毎日新聞社・東京日々新聞

社、大15・12・17。〔逝ける先輩の印象〕と改題。

昭57・6に中公文庫版

¹⁵高須梅溪 〔新声〕時代の小歴史〔文壇回顧録二〕

〔文章世界〕第10巻第2号、大4・2・1

¹⁶田中貢太郎 数奇の恋情の人田岡嶺雲の悲恋を想ふ

〔女の世界〕第2巻第3号、大5・3・1

大町桂月 不仕合せなる田岡嶺雲／数奇なる田岡嶺雲

〔十人十色 名物男〕実業之日本社、大5・3・23)

¹⁷大町桂月 小春の旅／余の見たる酒豪 (『泉声録』春

陽堂、大6・12・23) 発行日訂正 (国会図書館本)

²¹高須梅溪 類出せる文壇の人材／第三期時代の文芸／

文壇に於ける党閥と新人／新評論家の輩出 (『近代

文芸史論』日本評論社、大10・5・25)

²⁴斎藤昌三 文芸品解題 (『近代文芸筆禍史』崇文堂、

大13・1・15) 「霹靂鞭」を含む

高須芳次郎 翻訳文学及び文芸評論の進歩 (『日本

現代文学十二講』(新潮社、大13・1・28)

*高須芳次郎 文壇今昔話 (『随筆』第2巻第8、10、

11号、大13・9・1、11・1、12・1)

²⁶田中貢太郎 簸川中学時代 (『文豪大町桂月』青山書

院、大15・2・23)

高須芳次郎 文芸評論界の新人群起 (『早稲田文学』

第243号、大15・4・1)

笹川臨風 帝国文学発刊の前後 (同右)

松本龍之助 田岡嶺雲 (『明治大正 文学美術人名辞書』

立川文明堂、大15・4・5) 昭55・5に国書刊行会

から復刻版

山崎今朝弥 秋水書簡集―田岡嶺雲へ― (『幸徳秋水

文集』(解放群書7) 解放社、大15・8・1)

田中貢太郎 田岡嶺雲小伝 (田中貢太郎編『土佐五名

家随筆集』人文会出版部、大15・9・14) 大15・

10・14に『土佐五人随筆集』と改題発行

田中貢太郎 土佐五名家記―兆民、秋水、嶺雲、涙香、

桂月― (『改造』第8巻第11号、大15・10・1)

田中貢太郎 逝ける先輩の印象 (『貢太郎見聞録』大阪

毎日新聞社、大15・12・17) 昭57・6に中公文庫版

〔昭和期〕

²⁷鳴杖生 明治の三大慰問出版 (『愛書趣味』第2巻

第5号、昭2・7・15) 『むら雲』の紹介

高須芳次郎 私の新聞雑誌記者時代 (『新潮』第24

年第8号、昭2・8・1) 「情熱家田岡嶺雲の面目」

を含む

大町桂月 上州沼田より日光へ（『日本山水紀行』帝

国講学会、昭2・9・5）「田岡嶺雲の墓」を含む。

↓『桂月全集』第2巻、桂月全集刊行会、大5・2。

昭55・1に日本図書センターから復刻版

江見水蔭 落潮の哀れ／港に泊りて／太平洋に出て／泛

べる儘に／海底に眠る（『自己中心 明治文壇史』博

文館、昭2・10・28）

²⁸三浦圭三 田岡嶺雲（『日本文学辞典』文教書院・大

阪宝文館、昭3・3・5）

横瀬夜雨 「文庫」の人々（『愛書趣味』第3巻第4

号、昭3・6・10）

²⁹幸徳秋水 日記・随筆・雑録篇／文学評論篇（『幸徳

秋水文芸集』解放社、昭4・5・10）表紙のタイト

ルは「幸徳秋水創作集」

中西末造 無頁の書物（『愛書趣味』第4年第3号、

昭4・6・18）『霹靂鞭』を含む

高浜虚子 満州行前記（『ホトトギス』第324巻第10

号、昭4・7・1）

田岡嶺雲著『下獄記』／田岡嶺雲著『霹靂

鞭』（大原社会問題研究所編『日本社会主義文献』

第1輯〈世界大戦（大正三年）に到る〉、同人社書

店、昭4・9・18）平9・4に日本図書センターか

ら復刻版（社会科学書誌書目集成22）

³⁰田中貢太郎 土佐の五文士（『神を喫ふ』明星書院、

昭5・12・25）

³²篠田太郎 社会の矛盾と文学（『史的唯物論より観た

る近代日本文学史』春陽堂、昭7・4・5）昭28・

9に学芸社から再刷限定版（『近代日本文学史』）

³³斎藤昌三 明治の社会評論雑誌（『日本雑誌興亡史考そ

の6』）『書物展望』第3巻第2号、昭8・2・1）

「天鼓」「火鞭」を含む。↓『閑板 書国巡礼記』書

物展望社、昭8・12。平10・8に平凡社（『東洋文庫

639』版

斎藤昌三 青年文（藤村作編『日本文学大辞典』第2

巻、新潮社、昭8・4・25）昭25・10に増補改訂版

（第4巻）

高須芳次郎 田岡嶺雲（同右）

48・11に法政大学出版局版

斎藤昌三 明治の文芸雑誌（中）（日本雑誌興亡史考

宮田戊子 紫吟社・筑波会（『近代俳句研究』楽浪書

その10）（『書物展望』第3巻第6号、昭8・6・1）

院、昭9・6・1）「日本派以外の新派俳壇」のうち

「江湖文学」を含む。↓『閑板 書国巡礼記』書物展

横瀬夜雨 過去人（『雪あかり』書物展望社、昭9・

望社、昭8・12。平10・8に平凡社（『東洋文庫』639）

6・27）

版

登張竹風 田岡嶺雲（『人間修行』中央公論社、昭

高須芳次郎 ロマンチズム時代の思想と文壇の主

9・7・23）

潮／詩歌、戯曲を中心としての革新運動（『明治大

佐藤義亮、岩崎万喜夫記 佐藤義亮縦横談——明治文

正昭和文学講話』新潮社、昭8・9・28）

学・作家・編輯者・出版界——『国語と国文学』第

高須芳次郎 文庫時代の回想（『文芸雑誌華かなりし頃』

11巻第8号、昭9・8・1）（特輯 明治大正文学を

（『人物評論』第1年第10号、昭8・12・1）

語る）

³⁴森田草平 赤門派と「帝国文学」（山本三生編『日本

高須芳次郎 現代文学の大勢及び進歩（ほか）（『明治

文学講座』第11巻（『明治文学篇』、改造社、昭9・

文学史論』日本評論社、昭9・10・20）

1・17）

³⁵土方定一 明治浪漫主義文学に於ける新詩社の位置

土方定一 明治文学の文芸評論（山本三生編『日本文

（『立命館文学』第2巻第6号、昭10・6・1）

学講座』第12巻（『明治大正篇』、改造社、昭9・

湯朝竹山人 明治大正 操觚漫録（『書物展望』第5巻

4・8）↓『近代日本文学評論史』西東書林、昭

第10号、昭10・10・1）

11・6。昭23・9に昭森社（『思潮文庫3』）版。昭

³⁶登張竹風 交友録から（『遊戯三昧』山本書店、昭

11・5・18)

高須芳次郎 新声社時代点描 (新潮社出版部編『新潮

社四十年』新潮社、昭11・11・26)

佐藤義亮 出版おもひ出話 (同右)

尾崎士郎 創作苦心談 (『月刊文章』第2巻第12号、

昭11・12・1)

³⁷河井醉茗 『文庫』の全貌 (『醉茗詩話』人文書院、

昭12・10・20)

高須芳次郎 田岡嶺雲 (平凡社編『新撰大人名辞典』

第3巻、平凡社、昭12・10・22) 昭54・7に復刻版

(『日本人名大事典』と改題)

本間久雄 社会主義思潮 (『明治文学史』下巻 (日本

文学全史 巻11)、東京堂、昭12・10・28) 「田岡嶺

雲の説」を含む。平6・6に東京堂出版から復刻版

³⁸徳田秋声 光を追うて (11) (『婦人之友』第32巻第12号、

昭13・11・1) 小説

³⁹室積但春 現代俳句の結社と系統 (『解釈と鑑賞』第

4巻第1号、昭14・1・1)

尾崎久弥 田岡嶺雲 (『博浪抄』第4巻第8号、昭

14・8・5)

⁴²尾崎士郎 田岡嶺雲と泣蟲山 (『尾崎士郎選集』巻12、

平凡社、昭17・3・16)

木村小舟 「少年読本」の創刊 (『少年文学史』明治

篇下巻、童話春秋社、昭17・10・15)

岡野他家夫 新声社本 (『書物から見た明治の文芸』

東洋堂、昭17・12・20)

高浜虚子 万朝報入社 (『俳句の五十年』中央公論社、

昭17・12・25)

⁴³高浜虚子 田岡嶺雲／東洋的審美学 (『俳談』中央出

版協会、昭18・9・10)

⁴⁴笹川臨風 夜鬼窟 (随筆) (『書物展望』第14巻年第

3・4号、昭19・4・1)

付・田岡嶺雲参考文献目録

——昭和二十一年／平成十五年—— 補遺

服部之総 田岡嶺雲著、西田勝編『明治叛臣伝』(青

本文庫〕〔書評〕〔図書新聞〕昭28・11・21)

平7・2)

田岡嶺雲「嶺雲揺曳」(瀨沼茂樹編「名著

西田 勝 田岡嶺雲が愛児と初めて会った日(リレー

解題 近代日本思想史〕(亀井勝一郎ほか編「国民

随筆10〕(高知県立文学館ニュース)第10号、平

の言葉 百人百言集〕(現代国民文学全集18)角川

12・10)

書店、昭33・2)

西田 勝 田岡嶺雲の短歌観(「高知歌人」第55巻第

伊東 勉 日本におけるハイネ研究Ⅰ 田岡嶺雲のハ

631号、平13・2)

イネ論(「中日本自動車短期大学論叢」第3・4号、

檳林混二 『青年文』復刻を喜ぶ(推薦のことば)

昭47・12)

〔青年文〕復刻版内容見本、不二出版、平15・10)

西田 勝 田岡嶺雲の朝鮮観(「季刊三千里」第4号、

平出 隆 文学的転換への切迫した意識(同右)(同

昭50・11)〔特集 日本人にとっての朝鮮〕

右)

西田 勝 解説(「社会文学通信」創刊号、昭60・7)

田岡嶺雲「二葉亭四迷君を憶ふ」(資料紹介)の解

付記

説

前回は、「単行本」と「新聞・雑誌・単行本等所収論

腰原哲朗 「嶺雲揺曳」田岡嶺雲著(石本隆一ほか

文』に分けたが、今回は、後者のみを発行年月日順に掲

編『日本文芸鑑賞事典』第2巻、ぎょうせい、昭

げた。これまで発行年月までの記入であったが、今回は、

62・10)

年月日まで記入することにした。また、排列も、発行年

西田 勝 「田岡嶺雲の精神」(「高知県昭和期小説名

月日順とし、年月日が同じ場合は、誌名・書名の五十音

作集』2(「田中貢太郎・中」、月報、高知新聞社、

順とした。以上、山路愛山参考文献目録(戦前編)の場

合と同様である。年月日まで記入することにしたのは、現物確認の証拠を示す意味も含めた。調査不足のため、遺漏した文献も多いと思われるが、御寛恕いただきたい。本目録の作成にあたっては、前回と同様、次の先行参考文献目録を参考にさせていただいた。

・遠藤恵美子 田岡嶺雲 資料年表（昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第13巻、昭和女子大学光葉会、昭34・7）〈「田岡嶺雲」のうち〉

・——— 主要参考文献（高知県立文学館編『土佐の反骨・田岡嶺雲』高知県立文学館、平12・10）

なお、「補遺」については、西田勝氏、池田洋一氏からご教示いただいた。